

残像抄(4)

ひらぐしでんちゅう
—平櫛田中翁と大和文華館—

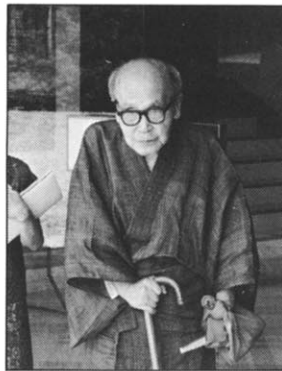
大和文華館 館長 石澤正男

百歳を過ぎてもなお饗饌(かくしゃく)として制作三昧の日々を送っておられた、日本木彫界の最長老、平櫛田中翁は一昨年(1978)の秋以来気管支炎のため入院され、昨年一月には退院されて東京都小平市の御自宅で療養に専念されていると伝えられ、翁を尊敬する多くの人々は、陰ながら翁が一日も早く健康を回復され、制作三昧の日常に復帰されることを祈念していたのでした。吾々の切実な念願も空しく、昨年の大晦日の新聞は田中翁が前日の午前1時2分肺炎のため遂に不帰の客となられた悲報を伝えると同時に、翁の偉大な業績と生前に受けられた数々の栄誉、翁の芸術家としての真骨頂を物語る多くの「田中語録」ともいえるべきものも公表されたことは、今もなお読者の記憶になまなましく残っていることと想像します。翁の葬儀は大晦日に密葬が行われ、本葬は令孫弘子さんを喪主として一月二十五日東京の青山葬儀場で日本美術院葬として盛大にとり行われました。

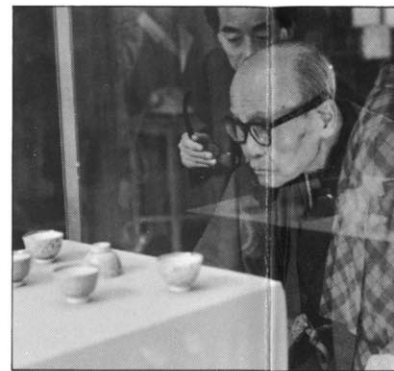
新聞では田中翁は明治5年岡山県後月郡西江原村(現在、井原市)の田中家に生まれとだけ報道されていましたが、詳しくは明治5年(1872)6月30日が誕生日です。従って亡くなられたのが1979年12月

30日ですから享年満107才と6カ月となります。最晩年の田中翁はノミを手にとられる日は少なかったようですが、盛に筆をとって翁独特の奔放自由な書に腕を揮われたようです。その点から見ても、田中翁は東京都下第一の長寿者であつたばかりでなく、日本はいうまでもなく世界の芸術界を見渡しても、死の間際まで制作を続けた人として長寿の最高記録を樹立された、誠に驚くべき超人でした。

富岡鉄斎翁(1836~1924)は画家として非常に長寿で、しかも多作であり、老来ますます制作に円熟味だけでなく、深奥でかつ澁刺さを発揮した代表的画人と見られています。翁はあと数時間で元日、即ち新しい干支を迎えて、数えで90才となる前日に急逝されました。鉄斎翁の作品には90才の落款のあるものが相当多数あることは、よく知られている事実ですが、それらの作品は新年を迎えてから揮毫依頼者に渡す意図のもとに1924年の夏頃から描きためておかれたものでした。翁自身は新年を迎えますますます画業に専念しようと意気込んでおられたに違いありません。田中翁の訃音に接した時、私はふと伝えられている鉄斎翁の終焉を想起したのでした。お二人とも偉大な業績をすでに築きあげておら



(1)田中先生('67-8-18)



(2)田中先生 青木木米展にて('65-10-21)

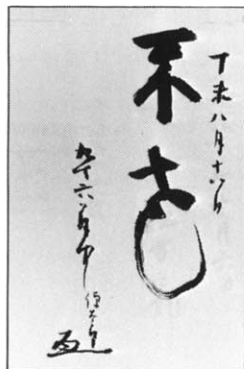
れるにも拘らず、決して過去の業績に満足せず、ますます自らの意になかったものを創造しようとする驚くべき強い執念に駆られて、生き抜こうとされた点に一脈の共通したものが感じられたからでした。

田中翁に就いては、最近のジャーナリズムを賑わしたばかりでなく、これから次第に本格的な田中翁の詳細な伝記、作品の研究等々にわたっての発表が行われるに違いありませんが、ここでは大和文華館を度々訪問された時のことを回想して、翁への追悼の一文といたしたいと思います。

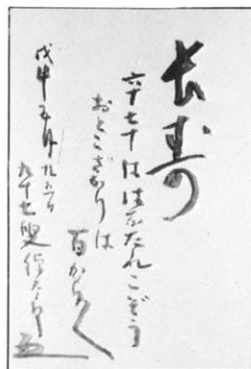
平櫛田中翁が大和文華館の来客用の芳名録に御署名されているのは昭和36年10月22日付が最初で、それは珍らしくペン書きとなっております。この芳名録を繰ってみますと昭和40年を除き、毎年お見えになっており、回数にして十一回となります。その中私は昭和39年の春大和文華館に赴任してきて以来八回も親しく田中翁の聲咳に接しえたのは誠に幸運であつたと思っております。

昭和42年8月1日に奈良市の著名な古美術商尚古堂店主の玉林善太郎氏が逝去され、その本葬が8月18日に市内の十輪院で行われました。その時田中翁は夜行列車の「大和」で朝早く奈良に到着され葬

儀に参列され、司会者の求めに応じて弔辞を述べられました。大和文華館からは私と学芸部課長衛藤駿氏(現慶応義塾大学教授)とが弔問に参りましたが、一般告別式の時刻に行きましたので、田中翁の弔詞は残念ながら拝聴できませんでした。私共が帰館してから午後2時頃田中先生が三人のお供の人々と大和文華館にお出でになり、展示場をゆっくり廻られた後、「今日は時間があるから、ゆっくり休ませて下さい。」とおっしゃって、くつろぎながらいろいろのお話をしてくれました。今なら録音しておけばよかったと、くやまれますが、お話の中で繰り返して「玉林さんはわしより30才以上も若いのに惜しい人を亡くして残念です。あの人には沢山名品を見せてもらったことが忘れられない。」とっておられました。それを伺いながら田中翁という方は誠に素直に人の好意を感謝してお受けになる方だと思いました。それから御予定を伺ったところ、今夜の「大和」で帰京されるといわれるので、全く驚きました。今はもうなくなりましたが「大和」という列車は名古屋・奈良を経由して東京一湊町間を走る夜行列車でした。しかも田中翁はいつも普通車の寝台を利用されるということを知って



(3) 芳名録より ('67-8-18)



(4) 芳名録より ('68-5-25)

いるので、驚きも一層大きかったです。旧知の美術商の葬儀に参列するため真夏の八月に東京・奈良間を、もちろん冷房装置もない夜行寝台車を利用してとんぼ帰りをされた田中翁の昔かたぎの義理堅さには全く頭の下る思いがしました。その日芳名録に一筆お願いしましたら

丁未八月十八日

不老

九十六翁中 倅太郎(花押)と、しっかりした書体で書いて下さいました(写真3)

それより約三年前の昭和39年7月25日に田中翁は令孫の珠子さんを同伴されて大和文華館を来訪されました。その時の展観は禅林水墨画、書蹟、鉄斎画、染付、ガラス等多岐にわたったもので、いわば夏向きの館藏品でした。私は田中翁のお伴をして陳列室をゆっくり一巡りして応接室に戻りました。すると翁は「今拝見した禅林水墨画の中の二幅の表具の部分を京都の便利堂に写真撮影させて東京に送らせて下さい。」といわれましたので私は「では確認しておくために、先生にもう一度現場へお伴させて下さい。」と申しあげましたら、翁は足どりも軽く、さっさと現場にゆかれ、松梅佳処図と松雪山房図の前に立ちどまられて、表具の

部分を数箇所はつきり指摘されました。今それらの部分を明瞭に思い出せませんが、私は便利堂の写真師には正確に伝えて、撮影してもらい田中翁にお届けしました。私が今でも忘れえないのは、私が田中翁にこれらの表具の裂の写真をどうなさるのですか、とお尋ねしましたら、田中翁は即座に次のように答えられました。「実はねえ、大磯の吉田さん(元総理故吉田茂氏)から応接間に飾る小品を頼まれて、彫刻の方はもう出来ているんだけれども、彩色がまだ出来ずに残っているんですよ。それで先刻この水墨画を見ていると、絵も中々いいのでゆっくり見ているうちに、表具の裂に気がついて、あれを一つ彩色の方の参考にしようと思ったわけです。この頃彩色代も随分高くなってね。あの位の小品でも一つ拾万円もかかるんですよ。」とって笑っておられました。このお話を伺って私は、この巨匠は、彩色は専門家にさせるにしても、その基本になる部分にはご自分の神経がすみずみまで行き届くよう、常に細心の注意を払っておられることを知って、改めて尊敬の念を深めたのでした。(’80-1-30記)

季刊 美のたより No.50

昭和55年 2月20日

発行 大和文華館